

# 特別支援学校における大学と連携した校外余暇支援活動の取り組みとその意義 参加者，保護者，学生ボランティアの視点から

著者	佐々木 健太郎，鈴木 徹，平野 幹雄，野口 和人
雑誌名	宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要
号	7
ページ	77-90
発行年	2012-06
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1138/00000704/">http://id.nii.ac.jp/1138/00000704/</a>



## 特別支援学校における大学と連携した校外余暇支援活動の 取り組みとその意義

—参加者，保護者，学生ボランティアの視点から—

佐々木 健太郎（宮城教育大学附属特別支援学校）

鈴木 徹（東北大学大学院教育学研究科）

平野 幹雄（東北文化学園大学保健福祉学部）

野口 和人（宮城教育大学特別支援教育総合研究センター）

### 要旨

筆者らは、平成 22 年度 10 月より宮城教育大学と連携し、同大学附属特別支援学校高等部在籍生徒を対象に余暇支援活動を開始した。本稿では、その枠組みを紹介することと、参加者、保護者、学生ボランティアの三者の視点から本活動の意義を考察することを目的とした。これまで 7 回の実践を行った結果、参加者については、活動に満足し、次の活動への期待感も喚起することができた。中には、学校での友達関係が拡大された生徒も見られた。保護者にとっては、長期休業中に生徒の余暇活動が充実すること、同年代の友達や学生とかわかれること、きょうだいも一緒に参加できることがメリットとして挙げられた。学生ボランティアについては、障害の児童生徒の理解に加え、その具体的なかわり方についても学べる場となった。大学の人材、資源を活用することで、参加者、保護者、学生にとって一定の意義を確認することができた。

### 1 はじめに

障害のある人にとって、余暇活動は、QOL の向上やノーマライゼーションの観点から大変重要である。「障害者基本法」には、障害児者が文化的な活動を円滑に行えるよう、諸条件を整備することが明記されている。学校教育においても、特に高等部においては、特別支援学校学習指導要領総則編（高等部）の「職業」の項目に、職業生活に必要な余暇の有効な過ごし方について理解を深めるよう示されている。

さて、本校は大学の附属校であり、校舎も大学の敷地内にある。専門的な知識を持った大学職員や学生等の人材、文化的な活動やスポーツ活動を行うことができる施設がある大学は、余暇生活を充実させるための地域資源の一つであると言えよう。大学と連携した余暇支援活動の先駆的な実践として、北海道教育大学で行われている“サマースクール”がある。平成 9 年より開始された“サマースクール”は、夏季休業中に地域の障害児を対象として、地域の施設を活用しながら余暇活動を提供している（木村・志村・齋藤,1999）。大学の学生をボランティアとして活用し、現職の教員等の協力も得ている。参加者本人、保

護者、学生の三者から高い評価を得ており、毎年成果をあげている（木村・渡邊、斎藤、志村,2000）。本校では、この“サマースクール”にならい、平成22年10月より高等部在籍生徒を対象に大学の人材や施設を活用した余暇支援活動（以下、“ささけんクラブ”と記した）を開始した。

本稿では、筆者らが開始した本校高等部在籍生徒を対象とした余暇支援活動の実践について、その概要について紹介することと参加者本人、保護者、学生ボランティアの三者にとっての意義について検討することを目的とした。

## II 方法

### 1 “ささけんクラブ”の概要

#### 1) 参加者

宮城教育大学附属特別支援学校高等部在籍生徒（障害の内訳は、知的障害、自閉症、ダウン症、広汎性発達障害等であった）を対象とした。生徒のきょうだいにも参加を呼びかけた。

#### 2) “ささけんクラブ”の趣旨

本活動の目的は次の3点とした。1点目は、様々な人と共に体験活動を行うことにより、障害のある生徒の余暇を充実させるとともに、将来の生活において余暇を主体的に楽しむ力を養うことである。2点目は、保護者へのレスパイトサービス及びきょうだいへの支援等を含めた、障害のある児童生徒の家族支援を行うことである。3点目は、大学と連携した学生ボランティアの積極的な活用により、子どもと直接かかわる機会を学生に提供することである。以上の目的のために工夫した点について説明していく。

まず、生徒本人の余暇の充実に対しては、活動への参加の主体を生徒本人に委ね、自発的に参加できるような状況を設定した。

その具体的な取り組みとして、活動場所を本校に隣接する大学とした。そのメリットとして、次の3点が挙げられる。1点目は、生徒が自分の力で活動場所に行くことができる点である。大学は、学校外でありながらも限りなく学校に近い場所にある。将来を見据えて生徒が自力で地域の資源を利用し、余暇活動に参加する場合には、環境の変化による心理面の負担や交通手段の確保等、様々な制約が生じてくる。しかしながら、大学は、普段の学校での学習活動においても利用する機会が多々あり、なおかつ普段の登校手段を用いることで容易に赴くことができる（完全に自立して大学に来られない生徒も、学生ボランティアを活用することで、保護者の支援は極力受けないようにする）。つまり、大学を活動場所とすることで、生徒にとって学校から離れ、地域の施設や資源を活用しているという感覚を残しつつも、そこに至るまでの心理的及び物理的な障壁がほとんどない状況を設定することができるのではないかと考える。参加者募集の形態も、登録制のようなことは行わず

自由参加とする。これらの条件により、生徒自身が参加の意思を決定し、自らの足で活動場所へと向かうことができ、より生徒主体の活動を展開できるものとする。2点目は、大学を活用することで、多様かつ独創的な活動を提供することができる点である。大学は、実験室や調理室、体育館などの様々な施設が複合している。大学教員等の専門的な知識をもった人材の協力の下、普段の学校生活では体験できない活動を提供することで、生徒の興味関心を拡大できるものとする。3点目は、人的資源の豊富さである。大学教員に加え、学生ボランティアを積極的に活用することで、活動の提供者だけでなく生徒をサポートしつつ共に参加する体験の共有者を確保することができる。さらに、その大学教員や学生は、生徒の学校生活において身近にいることから、他の場面でもかかわる機会があり、人間関係の構築、拡大も期待される。

次に、家族支援についてである。先述したように、大学を活動場所として設定したことで、多くの生徒が保護者による送迎を必要としなくなると考える。このことにより、保護者の負担は相当軽減されるものと思われる。開催日についてであるが、週末や土日については普段から生徒が家庭で生活を送り、余暇支援の利用もすでに行われていることが予想される。このことから、意図的に長期（または学期間）休業期間中の平日に開催することで、保護者の自由な時間を確保できるようにする。また、きょうだいの参加も受け入れ、きょうだいの余暇を充実させると同時に、保護者の負担をいっそう軽減できるようにする。

最後に、学生の教師としての資質向上についてである。特別支援教育の理念が謳われて久しく、宮城教育大学においても数年前より特別支援教育に関する講義が必修科目となっている。しかしながら、特別支援教育教員養成課程以外の学生が、実際に障害のある児童生徒と実際に接する機会としては、介護等体験や講義の中での学校見学など限られている。さらに、その際のかかわり方は観察という形態が主であり、障害のある児童生徒とのかかわり方について具体的に学ぶ場面は必ずしも十分でないと思われる。従って、学生が障害のある児童生徒と実際にかかわる機会を得るためには、サークルやボランティア活動に参加するなど、学生の自主性に大きく左右される。上記のような現状の中で、“ささけんクラブ”は、大学や特別支援学校を通して広く学生に呼び掛けることで、多くの学生に障害のある児童生徒とのかかわる機会を提供し得るものであると考える。活動場所も大学であることから、参加もしやすい。児童生徒とのかかわり方についても、教育実習のように指導する形態ではなく、一緒に活動に参加し楽しむという形態である。このような形態により、“障害”という言葉に先入観をもったり、子どもに対して身構えたりせずに障害児とのかかわり方を学ぶことができるのではないかと考える。

以上のように、“ささけんクラブ”は、参加する生徒、その保護者、学生ボランティアの三者にとって有意義な活動となるよう位置付けた。

### 3) 活動の計画、準備、運営

筆頭筆者が大学教員等に直接連絡を取り、活動への協力を依頼した。電子メールでやり

取りを行い、必要に応じて研究室等で打合せを行った。当日の運営に際しては、学生ボランティアを募った。ポスターを作成し、宮城教育大学特別支援教育総合研究センター及び学内ボランティアセンターに掲示し、広く呼び掛けた。附属特別支援学校に教育実習に来た学生には直接呼び掛けた。

#### 4) 実施日時とその内容

平成 23 年 10 月 12 日より 7 回の実践を行った。日時と主な内容については、以下の表 1 に示した。

表 1 “ささけんクラブ” の実施日時と主な内容

	実施日時	主な内容
第 1 回	平成 22 年 10 月 12 日 (火) 9:30 から 16:00 まで	・理科教育講座教員による実験 ・外国人講師との英会話体験
第 2 回	平成 23 年 1 月 7 日 (金) 9:30 から 15:00 まで	・家庭科教育講座教員による調理活動 ・餅つき体験 ・技術教育講座学生によるものづくり体験
第 3 回	平成 23 年 6 月 25 日 (土) 9:30 から 15:00 まで	・中学校家庭科教員によるお菓子作り ・大学空手道部員による空手体験
第 4 回	平成 23 年 8 月 2 日 (火) から 4 日 (木) までの 3 日間 9:30 から 15:00 まで	・理科教育講座教員による実験 ・技術教育講座教員によるものづくり体験 ・大学空手道部員による空手体験 ・大学チアリーダー部員によるチア体験 ・屋外での流しそうめん体験
第 5 回	平成 23 年 10 月 12 日 (水) 9:30 から 15:00 まで	・附属特別支援学校技師による竹細工体験 ・芋煮、竹を使つての炊飯等の調理活動
第 6 回	平成 24 年 1 月 6 日 (金) 9:30 から 15:00 まで	・調理活動及び餅つき体験 ・体育科学生によるエクササイズ
第 7 回	平成 24 年 3 月 22 日 (木) 9:30 から 15:00 まで	・家庭科学生による調理活動 ・理科教育講座教員による実験

## 2 結果の記録方法

### 1) 参加生徒の様子について

“ささけんクラブ” 参加時、及び学校生活での様子を観察し、筆記にて記録した。学校生活の様子については、友達とのかかわりの場面を中心に記録した。

## 2) 保護者へのアンケート調査

毎回の活動後に保護者へアンケート用紙を配布し、記入を求めた。アンケートの内容としては、①活動に参加する前後の生徒の様子や事後の感想について、②“ささけんクラブ”を含めた余暇支援活動に望むことについて、③自由記述とした。第3回以降は、④継続して活動に参加する中で生徒の様子について感じたことも記入してもらった。

## 3) 学生ボランティアへのアンケート調査

毎回の活動後に学生ボランティアへアンケート用紙を配布し、記入を求めた。アンケートの内容としては、①“ささけんクラブ”の活動は楽しかったか(とその理由)、②“ささけんクラブ”の活動の経験は障害児のことを理解するのに役立ったか(とその理由)の大きく2点とした。

## 3 分析方法

### 1) 生徒の“ささけんクラブ”参加への主体性について

生徒の“ささけんクラブ”に積極的に参加していると思われるエピソードと、保護者へのアンケート調査の①活動に参加する前後の生徒の様子や事後の感想において普段の生徒の様子と異なっている点を抽出し、生徒が本活動にどの程度主体的に参加していたか分析する。

### 2) “ささけんクラブ”に継続的に参加している生徒の変容について

対象生徒2名について、活動参加時の様子、アンケート調査から保護者が感じた生徒の変化、学校生活における友達とのかかわりの様子を基に、友達関係の変化や余暇活動の捉え方の変化を分析する。

### 3) 保護者の“ささけんクラブ”の捉え方について

保護者へのアンケート調査の②“ささけんクラブ”を含めた余暇支援活動に求めることの結果を基に、保護者が本活動に対して満足している点、及び今後求める点について分析する。

### 4) 学生ボランティアの“ささけんクラブ”の捉え方について

学生ボランティアへのアンケート調査の結果を基に、学生が“ささけんクラブ”の活動に対して肯定的に捉えている点を抽出し、学生にとっての本活動の意義について分析する。

### III 結果

#### 1) 参加生徒の主体性について

まず、活動中の様子としては、学校生活においては発話が少ない生徒が、他者からの働き掛けに言葉で応答したり、自分から「行ってきます」と保護者に挨拶したりと積極的に参加している様子が見られた。また、活動への参加の意思を決定する際にも、「友達と行くから、保護者はついてこなくても大丈夫」という発言が見られるなど、本活動への参加に際し保護者に依存することなく、生徒本人に主体があることがうかがえた。回数を重ねるにつれ、活動日に見通しをもち一人で早起きをしたり、一度体験したことのある活動の準備を自発的に行ったりする様子も見られた。事前の準備を依頼されたときも、快く引き受けて活動していた。

活動後には、普段の学校での出来事については全く保護者に話さない生徒が、“ささけんクラブ”活動後には自発的に保護者に出来事を伝えたり、作った作品を見せたりしていた。このことから、参加生徒にとって“ささけんクラブ”での体験は非常に印象深いものであり、満足していることがうかがえた。その満足感は、次の活動への期待感にも結び付いているようだった。事後アンケートの中で「次は何をする予定ですか」と作文を通して尋ねてきたり、活動直後に“ささけんクラブ”の活動を「楽しみにしていた」という具体的な発言も見られたりした。さらに、その期待感は自分でバス時間を調べて当日の予定を立てたり、持ち物を準備したりするなど、それまで学習したスキルを積極的に活用しようとする姿勢も引き出すことができた。詳しいエピソードについては、表2に示した。

#### 2) “ささけんクラブ”に継続的に参加している生徒の変容について

##### (1) 活動を通して友人関係が拡大してきた対象生徒C君について

C君は、本活動開始時（当時高等部1年生）より全ての活動に参加していた。1年生の頃のC君の諸活動に対する参加の様子としては、これまで経験したことのないことや一度失敗したことに関しては、極めて消極的であった。友達とのかかわりについても、学校では一緒に遊んだりする様子は全く見られなかった。“ささけんクラブ”参加時も、本人は活動に対して積極的に参加しているものの、友達とのかかわりは見られなかった。保護者のアンケートでも、第1回から第3回では、本人が経験したことが家庭でも話題の中心となる、とのことだった。このような中で、第4回（2011年8月）の活動後の保護者アンケートで、「高等部のどの友達が来るかということも楽しみにするようになった」と記述されていた。さらに、夏休みの宿題であった絵日記には、“ささけんクラブ”での理科実験の活動の様子について、友達とのやり取りを丁寧に作文していた。第5回（2011年10月）の保護者アンケートでは、「友達が話題に出てくるようになった」という記述があった。その後、学校に

において友達と休み時間に野球をして遊ぶ様子が頻繁に見られるようになった。

## 表2 生徒が主体的に活動に参加していると思われたエピソード及び保護者アンケートの結果

主体的に参加し、活動後の家庭での様子も普段と異なっていた男子A君

第3回が初めての参加であった。最初、保護者の声掛けに対しては「行かない！」とはっきり断っていた。また、それまで“親子行事”となると参加を拒む傾向にあった。しかしながら、今回は教師の促しにより参加することを決めた。保護者のアンケート結果によれば、普段は、学校での出来事は全く保護者には話さないが、この日は帰宅するとすぐに活動内容を自ら母親に話して伝えたそうだ。

第4回の保護者のアンケートによれば、自ら母親に参加したい意思を伝え、自分で当日の予定を考えていたようだった。活動参加時の様子としては、流しそうめんに参加し、他の生徒と夢中になってそうめんを食べていた。本人の感想にも、「流しそうめんがおいしかったです。」と記入されていた。保護者のアンケートによれば、そうめんは苦手でもほとんど食べられないとのことだった。また、ささげんクラブに継続的に参加する中で感じたこととしては、「参加直後の会話の多さでしょうか。沢山おしゃべりします!お友達の名前が沢山なのですが、母はわかりません(笑)」と記入されていた。

第6回の活動の終了時に感想を求めると、「僕は冬休み中本当に暇で、この活動を楽しみにしていたんです!」と力強く答えていた。

保護者に頼らず自分で予定を立てて主体的に参加していた男子B君

B君が2年生だった時から、全ての回に参加していた。保護者のアンケートによれば、第1回の活動前には、保護者は一緒に行く必要があるのかどうか分からず初めは参加を勧めていなかったそうだ。その後、本人から保護者に参加の意思を伝えた。保護者が一緒に参加できないことを伝えると、B君は、「いいんだよ。友達と一緒に行くから」と、答えた。保護者自身も、この言葉がうれしかったそうだった。

第4回の活動前には、学校に来て流しそうめんを使う竹の準備を手伝ってもらった。本人としては、非常に責任を感じていたようで、「流しそうめん、うまくできなかつたら僕の責任ですか?」と何度も聞いてきた。当日、全員の前で竹を切ってくれたことを紹介すると、満面の笑みであった。事後のアンケートでは、「楽しかったのは、流しそうめんです。」と記入していた。保護者への事後アンケートでは、「朝の何時のバスでとか計画を立てて自分なりに登校下校についての見通しも楽しく考えていました。」と記入してあった。

第5回でも、教師が早く来て手伝いをしてほしいという話を持ち掛けると、「9時頃着くように行きます」と言い、実際に当日9時に集合場所に來た。米研ぎの仕事をお願いすると、快く引き受けてくれ、学生ボランティアと活動に使う全員分の米を研いでくれた。

学校生活とは異なる様子を見せ始めた女子Aさん

第3回からの参加であった。第3回は、Aさんにとって初めての就業体験(現場実習)が終了した次の日で、疲れが残っていることが予想された。しかしながら、保護者への聞き取りによれば、Aさんは、ケーキ作りをするという見通しをもっていたようで、朝6時半に自ら起きてきたということだった。

第4回の活動では、Aさんにとって二度目の空手体験であった。前回の活動を覚えていたのか、武道場に入るや否や、自分から靴下を脱ぎ、腕まくりし、ズボンの裾を上げていた。その後も、終始笑顔で活動していた。

Aさんは、学校においては一日を通して発話はほとんど見られず、他の生徒に対する積極的なかわりもほとんど見られなかった。しかしながら、Aさんにとって3回目の参加となった第5回の活動では、活動前に母親に「行ってきます!」と大きな声で言っていた。活動中も教師の問い掛けに対して、約5割は言葉で応答することができていた。“ささげんクラブ”の活動には関係のない、たまたま居合わせた清掃員の方が声を掛けた際も、「はい」と明るく大きな声で返事をしていた。

次の活動を楽しみにして積極的に準備していた女子Bさん

Bさんは、高等部1年生の頃からほぼ全ての活動に参加している。第3回の活動後の保護者へのアンケート結果によれば、参加した友達のことや自分が経験した活動の内容をいろいろ話していたそうだった。一緒に参加した妹のことも詳しく話していたそうだった。保護者へのアンケートには、本人のコメントも記入されており、「お菓子作りが楽しかったです。次のクラブは、何をやる予定ですか」と、書かれていた。

第5回の活動の前には、持ち物を自分から進んで準備をしていたそうだった。アイロン掛けも自分からしていたとのことだった。活動に継続的に参加する中で保護者が感じたこととして、妹との二人での参加を何度か経験することで、行きも帰りもスムーズに行動できるようになった、ということが書かれていた。



## (2) 活動を通して余暇活動の楽しみ方が増えた対象生徒 D 君について

D 君は本活動開始時(当時高等部 2 年生)、電車や地下鉄の乗り方も身に付いており、休日是一个人で CD ショップや書店に出かけたりして自分なりの余暇の時間を楽しんでいた。また、デジタルカメラで写真を撮影することも好んでおり、自分が行った建物等を撮影していた。2 年生の頃まで、筆頭筆者が“ささけんクラブ”の参加を呼び掛けても、「今回は遠慮します」と言って断っていた。第 4 回の活動の際、流しそうめんに興味をもったようで初めて活動に参加した。すると、友達と一緒に食事の準備をしたり、流しそうめんを食べたりと笑顔で参加する様子が見られた。感想にも「今回初めてささけんクラブに参加して一番楽しかったのは流しそうめんでした。友達みんなと協力してテーブルのセッティングをしたり流しそうめんをみんなで食べたりしたことが一番良かったです。次回の秋休みの企画もぜひ楽しみにしています。」と記入してあった。また、保護者のアンケートでは、「今回の“ささけんクラブ”で学校の友達と過ごす余暇も楽しいと知ったようです。」と記入してあった。D 君は、第 4 回の活動後、学校において“ささけんクラブ”の活動中の友達の写真を自発的に配っていた。D 君は、第 5 回の活動にも参加し、積極的に食事の準備をしたり、学生ボランティアに話しかけたりしていた。第 4 回の活動と同様に、友達の姿をカメラで撮影する様子が見られた。保護者のアンケートからも、「一緒に参加した仲間達が楽しんでいる様子を写真におさめることも自分の楽しみになっているようです。」というコメントもあった。第 6 回の活動では、他者にカメラを手渡し、自分と友達と一緒に撮影してほしいと依頼している場面も見られた。この写真は、冬休みの宿題であった絵日記に使用され、活動中の出来事が丁寧に綴られていた。

## 3) 保護者の“ささけんクラブ”の捉え方

保護者へのアンケート結果から、保護者が“ささけんクラブ”について肯定的に捉えている理由としては、大きく 3 点挙げられた。1 点目は、長期休業中に生徒が充実した時間を過ごせるという点であった。長期休業中は、自宅で時間を持て余すことが多い中、1 日でも外で活動できることは、保護者にとっても貴重な時間のようにであった。また、生徒自身が“ささけんクラブ”での活動の様子を積極的に報告するなど、楽しい時間を過ごしていたことが伝わると保護者も安心するようであった。2 点目は、学校の友達も含めた同世代の人とのかかわりがもてるという点であった。学校の友達と学校以外場で会えることは生徒にとっても新鮮だったようで、保護者としてもその点を肯定的に捉えているようであった。また、活動のサポートをしてもらうボランティアも年齢の近い大学生であったことも肯定的に捉えられていた。生徒本人としても、休日は家族と過ごすことが多いものの、同世代の人と一緒に活動できる場を求めているという感想があった。3 点目は、きょうだいも一緒に参加できるという点であった。アンケートの結果から、きょうだい自身も活動に満足し、楽しみにしているようであった。具体的なアンケートの結果については、表 3 に示した。

表3 保護者が“ささけんクラブ”の活動を肯定的に捉えている点

---

長期休業中の子どもの余暇が充実したこと

- ・杵と臼を使った餅つきは初めてで、家族ではできない体験をさせていただきました。クリスマス、年末年始の行事が終わると、子どもは体力と時間を持て余していました。楽しいひとときを過ごさせていただきありがとうございます。
- ・夏休み中、家でゲームをしたりテレビを見たりという時間が多いので、外の活動で親なしで任せられる場所があるのは、親にとってもありがたいです。
- ・夏休み中、自宅で持て余す時間が多い中、本人にとっても親にとってもとてもありがたいと思いました。何よりも本人の笑顔を見ると充実した時間を過ごしたのだな…とこちらもうれしくなりました。

---

友達や学生などの同世代の人とかかわりがもてること

- ・親が参加することなく友達と楽しく過ごせることは違う意味で伸び伸び活動することができてよいと思います。
- ・今までこのような活動はなかったと思います。同じ学校の友達と休日を過ごすのはあまりないことなので楽しかったようです。同じ学校の友達と余暇活動ができれば楽しいと思います。
- ・学校のお友達でも夏休み中に学校以外の場所で会うと新鮮なようです。
- ・高校生になったので、本人も親子でというよりは、同年代の友達や若い人と一緒に活動したいと思っているような感じがします。
- ・ささけんクラブを通して、友達や先輩に学校の活動以外で“会える”ということが楽しみのようです。
- ・休日はどうしても家で過ごすことや、大人とのかかわりが多いので、同年代の友達との活動はとてもいい経験になるとと思っています。

---

きょうだいも一緒に参加できること

- ・今回の活動は学校の生徒のみならず、きょうだいも参加できたのがとても良いと思いました。障害を抱えている本人はもちろんですが、そのきょうだいたちも参加することによって、お互いに得るものが必ずあるような気がしました。
  - ・きょうだいに参加できる貴重な余暇活動で、毎回楽しみにしています。
  - ・兄弟の間で「お前は行くな！」とかケンカになるくらい楽しみにしていました。
  - ・きょうだいに参加している活動は、ささけんクラブだけなので、そこがまた嬉しいです。
- 

#### 4) 学生ボランティアの“ささけんクラブ”の捉え方

まず、“ささけんクラブ”の活動が学生にとって楽しかったかどうかという点についてである。ほぼ全ての学生が楽しかったと回答しており、その理由としては、大きく次の3点が挙げられた。1点目は、学生自身が活動内容に対して満足していたということであった。普段体験できないような活動を提供してきた“ささけんクラブ”の活動は、参加生徒のみならず学生にとっても興味関心を引く活動のようであった。2点目は、参加生徒が楽しそうにしている様子を見ることができたから、というものであった。生徒のリアクションや笑顔を見ることが、学生の満足感にも結び付いているようであった。3点目は、参加生徒と体験を共有できたから、ということであった。子どもたちと調理活動をして一緒に食べたり、体を動かしたりすることが、楽しかったようであった。具体的なアンケート結果については、表4に示した。

表4 “ささけんクラブ”の活動が楽しかった理由

---

学生自身が活動の内容に満足している回答

- ・「竹を切る」や「芋煮」など、このような体験活動の時にしかやらない活動で、ボランティアをしている私たちも楽しませてもらったから。
- ・活動内容は私自身楽しむことができた。
- ・ボランティア自身も初めての経験となる活動でした。“初めて”をたくさん経験できるとおもしろいと思いました。
- ・顕微鏡を久しぶりに触れたし、アリをあんなに拡大して観察したことがなかったので、楽しかった。

---

参加生徒の様子を見て満足している回答

- ・みんなすごく純粋に楽しんでくれて、自分も楽しかったです。「見えたー!」「すごい!」など、発見したことを言ってくれるのも、うれしかったです。
- ・子どもたちのわかりやすい反応を見ていてとても楽しかった。
- ・子どもたちの喜んでる姿を見ることができ、自分も楽しめた。
- ・ささけんクラブに参加する子どもたちはみんないいリアクションしますよね!同じ場にいるだけでとても楽しいです。

---

参加生徒と体験を共有できて満足している回答

- ・子どもたちといろいろなことを話しながら活動できたからです。
  - ・みんなと笑顔で活動できていたので、とても楽し参加することができました。
  - ・子どもたちと一緒に活動することができ、たくさんの子どもの笑顔を見ることができたため。
  - ・一緒に子どもたちと活動することで、たくさん笑いながら取り組むことができたから。ロールケーキ作りでは、子どもたちのアイデアがすごくて、一緒になって楽しめたから。
- 

次に、障害児のことを理解するのに役立ったかということについてである。障害児の理解に役立った理由としては、大きく次の4点が挙げられた。1点目は、障害児とかかわる機会そのものを肯定的に捉えているものであった。特に、特別支援教育教員養成課程以外の学生にとっては、障害のある生徒とかかわる機会が少なく、“ささけんクラブ”の活動は貴重な経験となったようだった。講義の中の知識だけでは理解が不十分であることに気付いたとの意見もあった。2点目は、障害のある子どもも健常な子どもも変わらないと感じているものであった。会話のできる生徒も多かったため、かかわる中で障害というものを特段意識することがなかったようであった。3点目は、様々な子どもと関わることもできたことを肯定的に捉えているものであった。人前で積極的に振る舞う子やそうでない子がいることや、興味関心が一人一人異なることなど、具体的に挙げているものがあつた。4点目は、参加生徒とのかかわり方を見て学ぶことができたというものであつた。“ささけんクラブ”には、附属特別支援学校の教員や教育実習を経験した上級生など、普段から参加生徒とかかわり慣れている者が多数参加していた。彼らの様子を見ることで、具体的なかかわり方について見習う姿勢が見られた。具体的なアンケート結果については、表5に示した。

表5 “ささけんクラブ”の活動が障害児の理解に役立った理由

<p><u>障害のある子どもと接する機会が得られたこと</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・かかわる機会が少ないので、今回参加して障害児の得意なことや苦手なことが分かったから。</li> <li>・実際に関わることができる機会は、大学にいても多いわけではないので、貴重な体験だった。</li> <li>・障害児と直接触れ合う機会が少ないから。</li> <li>・カレント(講義)で特支を取っているものの、実際に体験するかしないかでは大きな違いがあると思いました。こういう機会があればもっと多く体験したいと思います。</li> </ul>
<p><u>障害の有無をそれほど意識しなかった</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・会話もできるし、あまり“障害児”だと感じなかった。</li> <li>・あまり障害があるとわかる子どもがいなかったため、障害児を相手にしているという感じは少なかった。逆に言えば、障害があろうとなかろうと関係がないとも言えるのだろうか。</li> <li>・普通の子どもたちと変わらない部分も多々あり、積極的に取り組む生き生きとした表情は、輝いて見えたから。</li> </ul>
<p><u>様々な実態の子どもと関わられたこと</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・その子どもによって、違うことに興味を示すので、何に興味があるのか、子どもの様子から判断しなければならないということを学べたから。</li> <li>・自己紹介の時から様々な子がいると思いました。前に出て積極的に挨拶している子。何と云えばいいか分からず先生に聞いている子。恥ずかしくてなかなか言えない子。具体的には分からないが、行動や言動から様々な子がいると思いました。</li> <li>・色々なタイプの子どもがいて、その子たち全員と関わることができるからです。</li> <li>・様々な活動の場面があったので、その時々の子どもの生徒の反応や様子を知ることができたので。</li> </ul>
<p><u>子どもとのかかわり方を学ぶことができたこと</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもとのかかわり方(ほめたり、怒ったり)を見れて、勉強になった。いつも優しいだけではなく、怒るときはしっかり怒っているんだということがわかった。子どもの様子から状況を判断するのはすごいなと思った。</li> <li>・支援が必要だからと言って、必要以上のことをしてしまっては本人のためにならないということを身をもって知りました。子どもとの距離感の把握はとても難しいけれど、今回少し勉強できたと思います。</li> <li>・先輩方を見て、接し方などとても勉強になった。</li> <li>・少し対応に困ったときに先生方はこうするのかという対処法を見せていただいたため。</li> </ul>

### III まとめ

#### 1) 参加生徒にとっての意義

参加時の生徒の様子と保護者へのアンケートの結果から、“ささけんクラブ”の活動は参加生徒にとって非常に印象深く、意欲的に参加しているようであった、その満足感は、次回への期待感ももたらすものであった。さらに、活動を重ねる中で、学習したスキルを自発的に活用して参加するなど、参加の主体が保護者ではなく生徒本人となっているようであった。活動そのものの魅力に加え、保護者に頼らず自分の力だけで参加できることも、その一助となったと考えられた。

継続的に参加する中での参加生徒の変容についてであるが、C君については活動参加当初は活動そのものに強い関心を示し、自身が参加することで満足しているようだった。活動を継続する中で、C君の関心は、活動内容から活動を共有している友達へと徐々に拡大していったと考えられた。学校での友達関係にもよい影響をもたらしたことから、校外で学校の友達とかかわる機会をもつことの有効性が確認されたものと考えられた。

D君については、公共交通機関の利用の仕方など、余暇を楽しむためのスキルは十分に習得していた。しかしながら、その活用の仕方としては、一人で出かけるという限定的なものだった。そういった中で、流しそうめんの活動に興味をもち自発的な参加の意思を引き出したことは、普段体験できないような活動を積極的に企画してきた“ささけんクラブ”の一つの成果であると考えられた。実際の活動においても、D君の満足感を喚起するだけでなく、D君が元々持っていた趣味を実践する場としても活用されたことで、撮影した写真を友達に配るといった具体的ななかかわりの場面をもたらした。さらに、保護者のアンケートからも、それがD君にとって新たな余暇の楽しみの発見となったことがうかがえた。将来、地域で生活していく上で、周囲の人とかかわりは欠かすことができない。余暇生活においても、同じ趣味を共有したり、共に活動したりすることは重要なことである。その第一歩にD君が気付けたことは、大変有意義なことであつたと考えられる。

## 2) 保護者にとっての意義

保護者へのアンケートの結果から、障害のある子どもの放課後支援は充実してきているものの、夏休みなどの長期休業期間にはまだまだ子どもたちが時間を持て余していることが読み取れた。この点において、保護者からの一定の満足を得られたのではないかと考える。さらに、“ささけんクラブ”は、従来の余暇支援の形態にはなかった点として、学校の友達などの同世代の人と活動する場、きょうだいも一緒に参加できる活動の場を提供したことが挙げられた。特に、学校の友達と学校外で会うということはこれまで少なかったようで、非常に新鮮な印象を受けているようであった。これらの点については、今後子どもたちを“ささけんクラブ”に積極的に送り出してもらえる保護者にとってのメリットになりうるのではないかと考えられた。

## 3) 学生ボランティアにとっての意義

学生ボランティアへのアンケートの結果から、まず、学生は子どもたちが見せる様々な反応とその魅力に気付くことができたのではないかと考えられた。さらに、学生自身も本活動の内容にかなり高い興味関心を示しており、主体的に参加していることがうかがえた。その結果、いわゆるボランティアとして参加生徒を支援するという視点ではなく、あくまで同じ活動に向かって体験を共有することで、子どもとかかわることそのものに楽しさを感じることができたのではないかと考えられた。このことは、教師になって子どもとかかわる上での素地となるべきものではないかと思われた。

そして、その中で、学生は障害児に対する理解も深めているようであった。その内容には、学年や専攻などの条件によって内容に隔たりがあった。まず、特別支援教育教員養成課程以外の学生については、障害のある子どもとかかわる機会が少なく、“ささけんクラブ”の活動の機会そのものが有意義なものとなったようであった。さらに、活動の中で、“障害”という漠然としたイメージによる先入観が取り払われたことがうかがえた。一人一人の子どもに目を向けていた学生は、子どもの実態の多様さについて実感をもって知ることができたようだった。さらに周囲に目を向けていた学生は、教員や先輩の振る舞いから子どもとの接し方について具体的に学び取っていることがうかがえた。以上のことから、本活動がもつ1つのメリットとして、学年、専攻、障害のある子どもとかかわる経験の有無など、プロフィールの異なる様々な学生が同じ場で活動するということが考えられた。大学での講義や介護等体験、教育実習等は、基本的に学年単位の活動であり、基本的には同じ経験をもった集団で行われる。それに対して、本活動は、多様な経験をもった学生に加えて、教員も活動を共にしているので、先輩や教員の様子を見ることで、子どもとのかかわりなどについて直に学ぶことができ、普段の大学生活では得られない経験を学生に提供できるものと考えられた。

#### IV おわりに

活動時の参加生徒の様子やアンケートの結果から、参加生徒、保護者、学生ボランティアにとって一定の意義があることが確認できた。今回、大学という外部資源を活用したが、このことが本活動に寄与した面は非常に大きいと考えられた。具体的には、本活動の概要にも示した通り、大学は様々な人材や施設を併せ持っており、そこで展開し得る活動の幅が非常に広いということである。通常、学校で行われる学校行事等で活用される文化施設や娯楽施設は、基本的にその場所で一つの活動しか提供し得ないものである。子どもたちが普段の生活でそれらの施設を利用することを想定した場合、その都度現地まで行く方法を習得しなければならない。それに対して、大学は同じ交通手段で実に多様な活動を提供し得た。この点は、筆者らが想定した通り、子どもたちが主体的に参加できる状況作りに結び付いたと考えられる。また、結果には直接示していないが、大学側の対応も迅速で非常に協力的であった。活動場所や物的な支援の提供など、筆者らにとって非常に心強いものであった。回数を重ねていくにつれて、大学教員の間でも互いに本活動について話題にしている様子や本校の子どもたちと他の場面でかかわる様子も見られ、大学として本活動に対する肯定的な雰囲気を感じられた。このように、学校側から外部資源を積極的に開拓し、さらに、その相手との関係を構築していくことが、子どもたちに多様な活動を提供することにも結び付くのではないかと考えられた。

最後に、本活動の今後の課題についてである。対象の生徒についてであるが、子どもたちにとって余暇生活は障害の有無に関わらず将来に渡って続いていくものである。本活動を通じて、在学時の余暇生活を充実させることはできたが、卒業後の生活を見据えた取り

組みがさらにいっそう必要であると考えられる。今後は、卒業生を対象とし、継続的に参加者の余暇生活や友達関係について観察しつつ、本人や保護者のニーズを調査することで、さらにこの点に迫りたい。また、本活動の取り組みの成果から、学校教育における余暇生活に関する指導に還元できる点についても検討していきたい。

学生ボランティアについては、筆者らが企画した活動に参加するという形態でも、意欲的に学ぼうとする姿勢が見られたことから、今後は企画者側に積極的に参加させることで、より実践的な経験を積めるよう活動の持ち方を工夫していきたい。

#### 【文献】

- 1) 木村健一郎・志村克美・齋藤宇開. (1999). 障害のある子どもたちの「サマースクール」に関する実践的研究 (その 1)—開催に至る経緯と第 1 回実践報告—. 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 50 (1), 31-44
- 2) 木村健一郎・渡邊倫・齋藤宇開・志村克美. (2000). 障害のある子どもたちの「サマースクール」に関する実践的研究 (その 2)—第 2 回サマースクール実践報告と若干の考察—. 北海道教育大学紀要 (教育科学編), 50 (2), 47-61